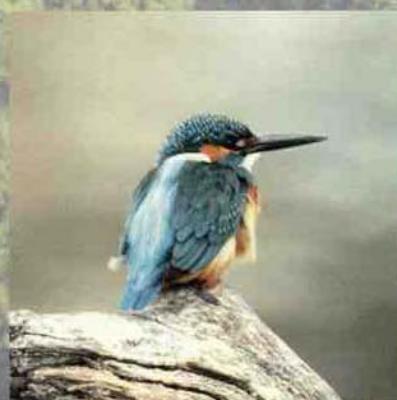


まちだ エコプラン

【概要版】

「人と生きものが共生するまちづくりをめざして」

町田市では、1997年1月に町田市緑の基本計画等策定委員会を設置し、「まちだエコプラン」の策定をすすめきました。「まちだエコプラン」は、生態系を活かしたまちづくりをすすめるための道しるべとしてまとめたものです。「まちだエコプラン」では、市民にとってはもちろん、生きものや人間すべてにとって望ましい環境が形成されるように、町田市のもつかけがえのない自然を後世に残すという観点から、「永続的な発展」に留意し、生態系ネットワークを形成し、「人と生きものが共生するまちづくり」をめざしています。



町田市

まちだの自然の特徴

～多摩丘陵の谷戸や源流には豊かな生態系が育まれています～

多摩丘陵は、広域的な「緑の回廊」である多摩三浦丘陵の北部域を占めています。特に町田市域の丘陵は、大都市近郊にありながらオオタカ、キツネ、ムササビが生息するなど、豊かな生態系が保たれており、南都山周辺の大緑地帯に対して北部の大緑地帯として生きものの供給基地、移動空間の役割、南部重要な位置を占めています。町田市の生態系を保全・回復・創出していくことは、首都圏の重要な「緑の核」や「緑の核」をつなげる「緑の回廊」を形成していくために、重要な位置づけとなっています。

関東山地から多摩丘陵・三浦丘陵に至る緑の回廊

町田市はほぼ全域が多摩丘陵に属しております。町田市の地形を端的に表現すると、穏やかに連なる多摩丘陵とそこに刻まれたやさしい谷戸地形といえます。町田の原風景ともいえる郊外部では、谷戸が複雑に入り込み、田畠があり、土手があり、谷戸を囲む雜木林があるなど、多様な生きものが生息する環境があります。

多摩丘陵は、広域的な「緑の回廊」である多摩三浦丘陵の北部域を占めています。特に町田市域の丘陵は、大都市近郊にありながら神奈川県に流れ、太平洋に注ぐ水の広域ネットワークを形成しています。多摩丘陵と切れ目なく海に至る鶴見川と境川、そしてその周辺緑地は、生きものを育む重要な「水と緑の回廊」を形成しています。

多様な生きものの宝庫

町田市には、複雑に入り込む谷戸地形や谷戸から供給される水系など、多様な自然環境の中で、豊かな生態系が育まれ、良好な自然環境が守られています。源流域の谷戸はさまざまな生きものが生息する自然の宝庫となっています。今回の調査では、既存資料や市民情報により多くの生物生息情報を集めることができました。



複雑に入り込む谷戸地形



3つの河川と源流

境川・鶴見川とその支流恩田川は、いずれも町田の多摩丘陵を源流域とし、市域から神奈川県に流れ、太平洋に注ぐ水の広域ネットワークを形成しています。

多摩丘陵と切れ目なく海に至る鶴見川と境川、そしてその周辺緑地は、生きものを育む重要な「水と緑の回廊」を形成しています。



町田市の3つの河川

多摩丘陵の広域的な緑のつながり

人の手が入り維持してきた自然環境

町田市域の樹林地の8割近くが、かつては薪炭林や、落ち葉の堆肥利用などの農用林として利用されてきた、クヌギ、コナラに代表される雜木林です。雜木林は、人の手が加わることにより、生物の多様な生息環境が創出され、さまざまなか生物の生存を可能にしてきました。しかし、近年では農用林としての利用が衰退し、管理されない雜木林にアスマネササやモモウツウチクなどが侵入し荒廃化が進んでいます。



分類	確認種数
植物	166科 1412種
哺乳類	9科 21種
鳥類	41科 149種
両生類	5科 11種
爬虫類	6科 13種
昆蟲類	291科 2493種
魚類	9科 20種

既存資料による
生物確認状況



まちだの自然の構成

～東西軸と南北軸、核や拠点から、生態系のネットワークが見出されます～

自然（生態系）は、行政区域界のまどまりとして存在していません。ここでは、自然の広域的なつながり、町田市周辺とのつながり、町田市域内のつながりに着目して、雨が降って川に集まる大地の単位である小流域のまどまりを単位として評価し、東西軸と南北軸がみられることがわかりました。まとまった自然域の残る町田市では、大きな視野で生態系をとらえる上で、小流域は大変良い空間単位といえます。また、本来その土地が有している機能を明らかにするために、大正時代と現在の土地利用とに分けました。例えれば、過去も現在も住居であれば、「生きものの場としての機能は低い地域」、あるいは過去も現在も樹林地であれば、「生きものにとっての安定した住み場であり、周辺への種の供給源であったり、周辺からの避難場所としての機能が高い地域」といって、より多様性の高い生物群集の説明が可能になるといえます。

小流域単位の評価

小流域は、地形、気象、水循環、土壤、土地利用、植生や動物の多様性など、生態系を支える地形構造の基本単位となっています。したがって、小流域環境の多様性を分析することにより、生物種の豊かさを支える生態系の質を科学的に推定しました。小流域評価図では、評価4～6の小流域が連なる東西の連続性をもった「東西軸」、また、評価3～5の小流域が連続性をもった「南北軸」がみられます。



動物の移動からみた評価

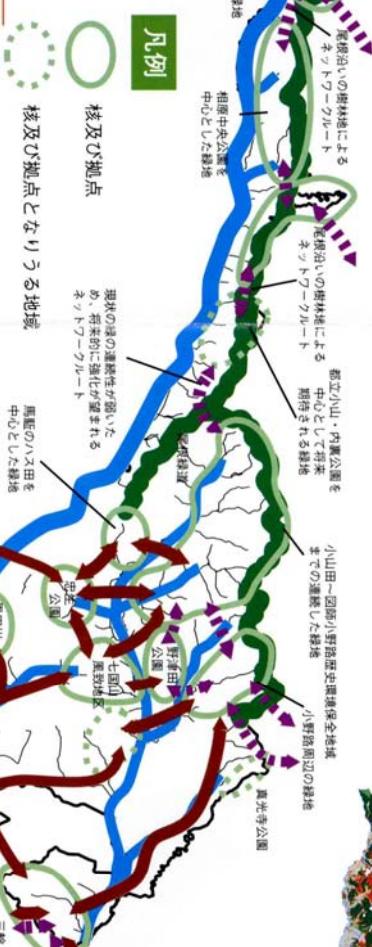
動物が生活するためには、その地域に食物があること、繁殖に適切な場所、避難場所があること、それぞれの種の個体同士が出会えることなどが必要です。そこで、ここでは動物の行動圏を考慮し、生物の移動空間から森林や緑地の連続性を把握しました。



人と生きものが共生する まちづくりをめざして

～生態系ネットワークの形成～

生態系ネットワークを形成するためには、「東西軸」、「南北軸」に「河川環境軸」と「尾根軸」を加えた4つの軸と、「核」、「拠点」等の「緑のまどまり」を保全・回復・創出していくことが必要です。これらネットワークは市内のみなならず、市外との連携を図ることによって、より多様性の高い生物群集の説明が可能になるといえます。



凡例

- 核及び拠点
- 核となりうる地域
- 哺乳類の移動から見たネットワーク
(将来的に望まれるネットワーク)
(行動半径50~150mによるルート)
- 鳥類の移動圏から見たネットワーク
(行動半径50~150mによるルート)



自然的 土地利用の評価

土地利用に潜在する生態的機能を分析するために、1923（大正12）年と1992（平成4）年の土地利用現況図を重ね合わせて検討しました。この自然環境特性区分図では、過去と現在の土地利用変化に伴う生態的な機能を考慮し、「生きものの場としての機能は過去も現在も住居であれば、「生きの場としての機能は低い地域」、あるいは過去も現在も樹林地であれば、「生きの場としての機能が高い地域」といって、より多様性の高い生物群集の説明が可能になるといえます。

鳥類の移動

哺乳類の移動

生態系ネットワーク概念図

自然環境特性区分図

エコプランを活かしていくために…

「まちだエコプラン」を活かしていくためには、小流域の情報を基礎データとして各種まちづくりや関連調査への対応が図れるよう、今後とも整備充実していく必要があります。また、市民のみなさんと連携して現地調査を継続して行い、生物生息情報を充実するとともに、小流域ごとの生物生息環境とそのネットワーク化について更に検討することも必要です。そして、市民、行政がエコプランの趣旨を広く共有化し、各種のまちづくりの計画に配慮・活用されることが望まれます。



まちだエコプラン【概要版】

発行日 2000年(平成12年)3月
発行者 町田市
〒194-0033
編集 町田市木曾町2, 185-1
印刷 株式会社 イコープリント